

【A 会場】

ノダ文研究の現在地—ノダの時空間変異から見た研究の展開—

司会：林淳子（慶應義塾大学）

発表：幸松英恵（東京外国語大学）

林淳子（慶應義塾大学）

野間純平（島根大学）

ノダ文研究は、2000年前後に現代共通語のノダ文について精緻な記述が積み重ねられ、ある程度の共通見解が形成されてきた。本企画では、文法史研究および方言文法研究の立場から、近世の日本語や各地方言のノダ相当形式を取り上げることで現代共通語とは現れ方の異なる事例を提示し、それがノダ文研究全体にもたらす影響について議論する。

幸松発表「ノダとノサー「ノダ文」の用法の時間的変異—」では、現代語の「ノダ文」に見られる非事情文と共通する用法が近世期のノサ文に見られることを紹介し、この用法が他のノダ系表現に広がっていった結果、現在の「ノダ文」に見られる事情文と非事情文の共存状態を作り出したのではないかという仮説を示す。

林発表「ノとノデスカの成立—「ノダ文」の疑問文型の時間的変異—」では、近世から現代にかけて「ノ」を含む疑問文の中心的な文型がノカ・ノダから、ノ・ノデスカに交替するという事実を紹介し、その背景に「ノダ文」の疑問文版としての再分析があった可能性を示す。

野間発表「ノのない方言の「ノダ文」—「ノダ文」の空間的変異—」では、「行くダ」のように、用言にコピュラが直接つく方言を取り上げる。このタイプの方言では、「用言+ダ」が「ノダ文」に相当すると言われることがあるが、その意味には多様性があることを、主に島根県出雲方言の事例を通して示す。

**【B会場】**

**作文の表現力と発達—資源構築から分析と評価へ—**

司会：宮城信（富山大学）

発表：今田水穂（筑波大学）

清水由貴子（聖心女子大学）

田中弥生（国立国語研究所プロジェクト非常勤研究員）

砂川有里子（筑波大学名誉教授）

本研究では、「児童・生徒作文コーパス」（国立大学附属小中学校での悉皆調査：平成14～16年）と「清流環境作文コーパス」（小学生作文コンクールの全応募作品：令和2年）を資料に、以下4つの発表を行う。

発表1 「作文コーパスの用途と設計について」（今田）：本発表では、資料となる作文コーパスの、概要、設計、開発工程、利用方法を解説する。また、研究目的に応じたアノテーションの必要性や、どのような形式のデータの提供が有用かについての知見を報告する。

発表2 「児童・生徒の作文に見られる誤用」（清水）：本発表では、作文コーパスに誤用タグを付し整理した。それを踏まえて、児童・生徒の作文に見られる誤用の種類や誤用が現れる時期について分析を行う。さらに、語彙の誤用とも文法の誤用とも言えない「微妙な誤用」について焦点を当てていく。

発表3 「児童の作文における表現の脱文脈化観点による可視化」（田中）：本研究では、修辞機能分析（RFA）を活用して、作文に脱文脈化指数（場面依存度を表す数値）を付すことで、書き手が言及する対象である事態や事物、人物等の捉え方の分析を行う。また、実際の作文内の脱文脈度の推移も確認する。

発表4 「機能語的な副詞の調査—母語話者児童生徒と第二言語学習者の比較—」（砂川）：近年急増する日本語を第二言語として学ぶJSL児童の日本語指導の改善は喫緊の課題である。本研究では、その基礎研究として作文コーパスとI-JAS（多言語母語の日本語学習者横断コーパス）を比較し、母語話者児童・生徒の機能語的な副詞の学年別の使用実態や、母語話者児童の日本語習得と外国人学習者の日本語習得の相違を検証する。

【C会場】

一語から始める文法研究—さまざまな手法を用いて—

司会：建石始（神戸女学院大学）

発表：建石始（神戸女学院大学）

許燕（名古屋大学大学院生）

朴秀娟（神戸大学）

帖佐幸樹（東亜大学）

本パネルセッションは、文法研究につながる一語の研究に注目し、さまざまな手法を用いて分析することで、「一語から始める文法研究」の可能性を探りたい。建石発表は「全く」という語に着目して、副詞が名詞を修飾する現象について分析を行い、コーパスを利用した出現位置に関する研究を提案する。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を用いて、「全く+の+名詞」が出現する位置、「全く」が修飾する名詞の特徴と出現位置の関係を考察する。また、他の副詞についても、出現位置という観点から名詞を修飾する現象を分析する。許発表は「一応」の出現形に着目して、その構文を考察するとともに意味・用法の記述を目指す。ここでは、「一応調べてみた」という用法から「教えてあげたよ一応」を経て、「A：課題、もう終わった？B：一応ね」のような談話標識としての用法へと変化していると考え。次に、「一応まだ明るい」などと、性質や属性を修飾し得る点から「一応」を、〈程度性〉と〈評価性〉をあわせ持ち、談話機能も果たす副詞であると位置づける。朴発表は「なかなか」という語に着目して、「なかなか」がもつ異なる意味・用法間の連続性を記述し、それを糸口に、「なかなか」が示す評価的意味について考察する。コンテキストに着目した意味・用法の分析を行うことで、コンテキストに着目した意味・用法の分析の有用性を再確認し、既存の意味・用法の記述内容に新たな提案ができる可能性を提示する。帖佐発表は「用」という語に着目して、日本語母語話者を対象とした文予測調査を実施した。その結果として、「私に何かNPですか」という構文を成立させる背景には実質語「用」の存在が関与していること、また、その背景には「用」の運用実態が反映されていることを示す。さらに、展望として他の名詞や構文における援用可能性を述べる。

**【D 会場】**

**コーパスによって近現代 140 年の日本語文法の変化を探る  
—『日本語歴史コーパス』と『昭和・平成書き言葉コーパス』を用いて—**

司会：田中牧郎（明治大学）

発表：田中牧郎（明治大学）

近藤明日子（東京大学）

小木曾智信（国立国語研究所）

永澤済（上智大学）

2023 年春に『昭和・平成書き言葉コーパス』が公開され、従来あった『日本語歴史コーパス 明治・大正編』とつなげることで、明治から平成までの 140 年間の近現代語の歴史を自在に研究できるコーパスが構築された。このコーパスがどのような特徴を持ち、その特徴を生かすことでどのような研究が可能になるのかについて、展望 1 本と研究 3 本（接続詞、可能表現、「取り返す」）の発表を行い、このコーパスを用いることで、日本語文法の近現代史の研究が活性化することを目指した議論を行いたい。

展望発表は、140 年分のデータが、雑誌、新聞、小説・ベストセラーの 3 媒体から構成されることと、各媒体の分量を示した上で、口語断定助動詞に「である」の隆盛・衰退と「です」の伸張という流れがあることを把握し、語種比率の推移から位相差の研究の可能性を探り、頻度増の著しい「段階」という語を例に共起語の交替から意味変化を推定する研究の広がりを見通す。研究発表のうち接続詞の研究は、常体の文章で使われる接続詞を頻度指標によって 7 つのクラスタに分け、クラスタごとの頻度推移の特徴とその歴史的背景を考察する。同じく可能表現の研究は、多様な可能表現形式の雑誌・新聞における頻度推移を明らかにし、言文一致が進行する時代とその後しばらくは、「～し得る」が広く使われ続けていたことや、20 世紀後半以降は、サ変動詞では「できる」、和語動詞では可能動詞がそれぞれ最も一般的な形式になっていくことなどを解明する。そして「取り返す」の研究では、平安時代から現代までの用法を精査し、江戸時代までは、過去に戻る〈時間系〉や、物について言う〈物質系〉の用法が中心だったところから、明治時代以降に名詞用法が中心になっていくという大きな流れをとらえ、各用法が、用例全体の中でどういう位置を占めるかを明確に把握できる、コーパス研究の利点を示す。